

# 暴かれた真実。業界黙示録

「暴かれた真実・業界黙示録」は、実際に起こったパチンコ・スロット業界の事件・詐欺・摘発などをもとに構成された実録風ドキュメント連載である。登場人物や店名は仮名化されているが、事件の内容は極力事実に基づき構成されている。閉ざされたホールの奥で何が起こっていたのか――いま、その真実が暴かれる。

## File.03 実録・ホルコンが導いた裁き――横浜・西口ホール遠隔操作事件

それは、奇妙な一致から始まった。出勤途中のバスで庄司達也が読んでいたスポーツ新聞の片隅に、小さな見出しが載っていた。

「〇〇店にて常連客の出玉急増、不正の可能性も」

一見、よくあるゴシップ記事にしか思えなかった。しかし、庄司の目は吸い寄せられるようにその記事を追った。

――あのホールと同じ系列かもしれない。

業界にいても、誰も口に出しては言わない。あの仕組み。客が運だと信じているものが、裏では誰かに支配されている現実。

庄司の脳裏に、あの光景が甦った。夜のバックヤードに浮かぶ液晶画面。点滅する制御信号。人知れず切り替えられていく。波。

彼は思った。「忘れてはいけない。これは過去の話じゃない。いまも、どこかで起きている」。

その思いが、すべての記録を語るきっかけとなった。

### ■不自然な「爆発台」

午前十時。神奈川県横浜市西口にある中型ホール『パラミリオンセブン』（仮名）の開店直後、六番台の『CRスーパードラゴン』の『2』が異常な挙動を見せていた。五百円で初当たり、そのまま十連チャン。わずか三十分足らずでドル箱が八箱に達していた。

「おかしい。あの台、昨日も爆発してるぞ」。周囲の客からそんな声が漏れる中、常連客・古川健司（仮名）はある違和感を覚えていた。――あれは、出すように「仕組まれている」。

この店では、定期的に特定の台だけが極端な出方を見せていた。必ず同じ客が、同じ台に座り、そして当たる。出玉の波が、不自然なほどに

都合よく訪れる。

「遠隔操作」という言葉は、都市伝説のように語られてきたが、誰も確証を得た者はいなかった。だが、このホールには確かに、「それ」が存在した。

### ■内部者の葛藤

庄司達也（仮名・当時二十八歳）は、この店で働くアルバイトスタッフだった。大学を中退し、昼夜問わず働きながら生活費を稼ぐ日々。そのうちに、店舗の「裏側」に触れるようになった。

「深夜、誰もいないバックヤードで、あのPC画面が動いているのを見たんです」。そこには、島ごとの出玉状況、客の滞在時間、そして出玉制御の命令が記された操作画面が映っていた。

特定の台番号が赤くハイライトされ、そこに「出す」「止める」の指示

ぎたな。今日は止める」。彼はもう限界だった。

「こんなの、ただの詐欺じゃないですか」。庄司は密かに証拠を集め始めた。遠隔操作中の画面をカメラ付き携帯で撮影。操作マニュアルのコピーも、深夜の隙を突いてPDF化した。

出勤簿やシフト表、過去の売上データ、台ごとの出玉履歴も併せて記録。どの時間帯に、誰が、どの台を操作したのかが一覧化できるよう資料が徐々に整っていった。

庄司は、何度も躊躇した。出せば最後、人生が変わる。だが、それでも見て見ぬふりはできなかった。

そして、神奈川県警の生活安全課へと告発状を提出した。「これが、遠隔操作の証拠です」。警察は当初懐疑的だったが、庄司の提出資料には、機種名・台番号・操作内容・日時が正確に記録されており、即座に捜査が始まった。

### ■摘発の日

二〇〇七年一月二十四日、午前九時十五分。開店準備中のホールに、私服刑事と制服警察官を含む捜査班が一斉に踏み込んだ。「全台、電源を落としてください」。

ホール内は騒然となり、営業前にもかかわらず外にいた客たちにも



異様な空気が伝わった。

バックヤードでは、ホルコン操作用PCが押収された。解析の結果、過去数ヶ月にわたって出玉制御が行われていた記録が明らかとなった。さらに、指示書・管理台帳・売上連動操作表なども見つかり、遠隔操作の実態が浮き彫りになった。

新聞各紙は『神奈川県警、遠隔操作ホールを摘発』『出玉操作で客を欺いた』と報じ、業界に激震が走った。店長、副店長、操作担当者の三名が風営法違反の容疑で逮捕され、ホールは即日営業停止となった。

### ■沈黙の業界

事件後、周辺のホールでは突如「ホルコンメンテナンス」と称した工事が相次いだ。一部のベテラン客は「他の店もやってたんじゃないか」と囁き合ったが、誰も証拠を示すことはできなかった。

業界団体は「個別店舗の問題」として公式なコメントを控えた。関係者の一人は後にこう語った。「遠隔

操作は昔から噂されてきたが、これだけ明確な証拠が出たのは初めて。業界全体が震え上がった」

「俺は、誰かの人生を壊したかもしれない。でも……あのままだったら、もっと多くの客が騙され続けていた」。庄司はそう語る。今は別の街で、警備会社の仕事をしている。過去のことを話すことはほとんどないが、それでも時折、夢に出てくるのは、あのホールのパネルの光と、鳴り響く確変音だ。

「パチンコは、偶然を装った必然でできている。でも、それを意図的に操作する者がいたら、それはもう、賭博ですらない」。彼の言葉は、誰よりもその現場を知る者の証言だった。

そして、今日もどこかで回るデジタルの海に、同じような「手」が伸びていないとは、誰にも言い切れない。

### ■告発者の証言（追補）

庄司は現在、事件当時を振り返るメモをノートに綴っている。「遠隔操作なんて、最初は冗談かと思っただ。でも、あの台が当たるかどうかを「人間が決めてた」って気づいた瞬間、背筋が凍りました」

操作指示は決して一人では行われていなかった。店長・副店長、そし

が点滅していた。操作を担当していたのは、副店長の三宅（仮名）と、もう一人の幹部クラス社員だった。

「出すタイミングや止め時は、その日の売上目標や客層の偏りで決まる。波を作るんです。客が「今日は出る日だ」と信じるように」。庄司は、見てはいけないものを見てしまったという感覚に囚われながらも、口をつぐんだまま業務を続けた。

それでも、自分の手は直接的に操作に関わってはいない、という自己弁護が、わずかな良心のよりどころだった。

次第に、罪悪感はストレスに変わり、眠れぬ夜が続いた。客の笑顔すら、偽りに見えた。

### ■決断と告発

ある日、出勤前に庄司はこう言われた。「昨日の海の六番、あれ出しす

て本部から派遣された技術アドバイザー」と称する人物までが関わっていたという。

「裏マニュアルの表紙には、あからさまに「演出補助管理手順書」って書かれてた。これを「演出」って言うのかよって、心底思いました」。警察が摘発に動いた背景には、庄司の提出した「客観的証拠」の存在が大きかった。

遠隔の操作履歴だけでなく、「誰がいつ・何を操作したか」が明記されていた記録ファイル。それは、単なる噂でも憶測でもなく、明確に証明可能な「不正の実態」だった。

庄司は最後にこう記している。「告発して良かったのか、今でも分かりません。でも、自分の中では……あれが限界だったんです」。そう語る彼の言葉は、あまりにも静かで、そして重かった。

事件から十年以上が経った今も、庄司の証言は語り継がれている。あの日、彼が勇気を出さなければ、この事件は永遠に闇に葬られていたかもしれない。そして業界は、「演出」という名の欺瞞に包まれたままだったかもしれない。

そしてこの記録が、どこかの誰かが、再び「波」を操作しようとするその瞬間を、ほんの少しでも思いとどまらせる一助になることを、彼は願っている。